

ヨーロッパ共通参照枠の基本理念と日本における受容の問題

2007年12月5日神奈川大学横浜キャンパス外国語教育協議会講演会

境 一三 SAKAI Kazumi

skazumi@hc.cc.keio.ac.jp

<http://web.hc.keio.ac.jp/~skazumi/>

目次

- ・ なぜ今言語教育を語らなければならないのか？
- ・ 慶應義塾の言語教育の問題
- ・ 外国語教育研究センターの問題意識と取り組み
- ・ CEFR日本版の成立
- ・ 欧州評議会とその言語政策
- ・ 欧州の外国語教育の変遷
- ・ CEFR成立までの背景: The Threshold Level
- ・ CEFRの理念
- ・ 日本におけるCEFR受容の問題

なぜ今言語教育を語らなければ ならないのか？

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 日本における外国語教育の現状
 - 縦のつながり: 小学校への英語教育導入と一貫性・継続性の問題
[Cf. 神奈川大学第11回「英語教育研究大会」](#)
 - 横のつながり: 学部・学科を超えて、大学としてどのような言語教育を提供するかという議論の不在
- 多言語・多文化化する社会の中で、子供たちにどのような言語話者になってもらいたいのかという議論の不在
- 言語政策・言語教育政策の不在
 - 学校単位、市町村レベル、都道府県レベル、国家レベル
 - 超国家レベル

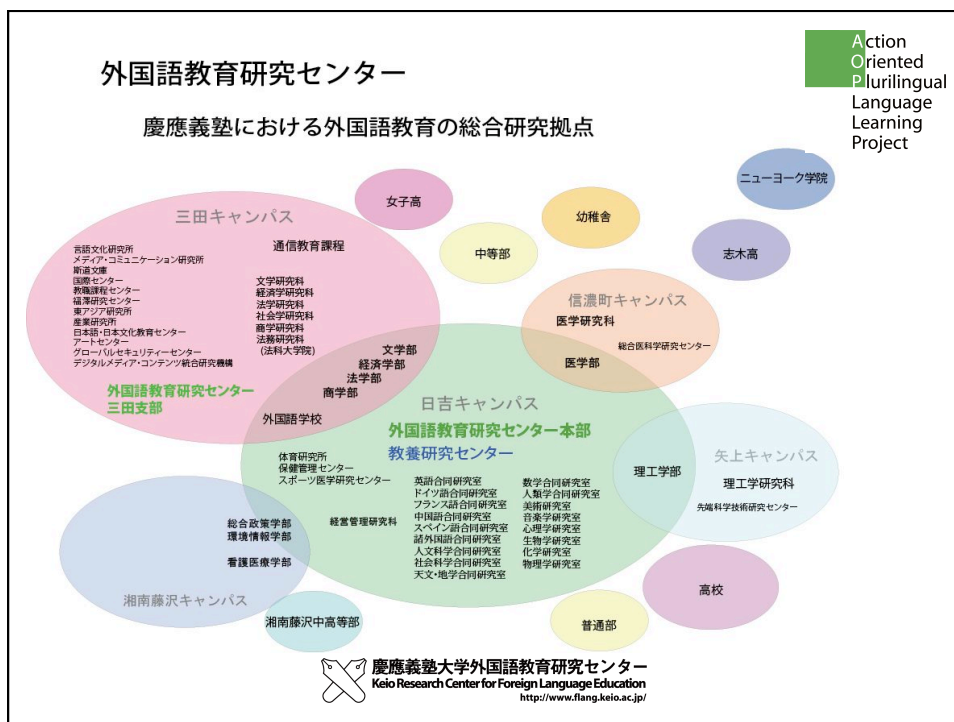
 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

慶應義塾の言語教育の問題

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 多様な学校学部などを含む学塾
 - 1 小学校
 - 3 中学校
 - 5 高等学校
 - 9 学部
 - 大学院
- 義塾全体での議論の不在: 言語教育の理念や目標を共有していなかった
 - 継続性・接続の問題
 - 学部間の壁の厚さと学生の不利益

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>



外国語教育研究センターの問題意識と取り組み

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

慶應義塾における言語教育政策立案の中核となる

- 一貫教育
- 複言語能力開発
- 自律・協調学習

複言語・複文化能力養成のための基盤構築
←先行するヨーロッパの言語教育政策
(CEFR)の研究に基づく実践

慶應義塾大学外国語教育研究センター
 Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

CEFR日本版の成立

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 2000年から吉島茂氏(東京大学名誉教授、現聖徳大学)を中心とした有志が若手ドイツ語教員の研修を行う。(2003年から日本独文学会の「ドイツ語教員養成・研修講座」となる。)
- CEFRは講座の教材の一つとされ、日本語翻訳の企画が生まれた。
- 吉島氏を中心とした翻訳グループ(英・独・仏)が結成され、Goethe-Institut の援助を得て2004年に出版された。(ロゴ参照)



Council of Europe (欧州評議会)

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- CEFRは欧州評議会の主導により成立
- 欧州評議会の役割
 - 人権、民主主義の保護、社会的・法的規範の確立のための合意形成、共通の価値観に基づくヨーロッパ・アイデンティティの自覚促進
 - 特に文化、教育政策に取り組む
 - 言語教育政策:個人、地域、国のアイデンティティを尊重しつつ、ヨーロッパ・アイデンティティを育む



欧州評議会の言語政策

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 言語の多様性の促進(→複言語主義)
- 相互理解の促進
- 民主的市民性の促進
- 社会的結束の促進

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

欧州の外国語教育の変遷

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- エリート教育から一般人教育へ
- 教員中心から学習者中心へ
- 古典教育から異文化コミュニケーションへ
- 学校教育から生涯教育へ(ダイナミックな学習)
- 一貫性と透明性の確保
- すべての生徒が母語以外に2言語を学ぶ(1+2言語政策)

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

CEFRの先蹤: The Threshold Level (van Ek 1975)

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 適切なコミュニケーションができる最低限の能力の提示
- そのためのトピック、機能、概念、語彙、文法項目を記述
- 社会文化能力、待遇表現、自律学習なども記述

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

CEFRの成立まで

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 1971年以来欧州評議会が作業を続け、2001年に Common European Framework of Reference for Languages 英語版を出版。以降、各国語版が出版される。
- 1991年のRüschlikon 会議(欧州評議会+スイス連邦政府)がCEFR誕生の直接のきっかけ。
 - 相互理解のための言語学習・教育
 - 就学前児童から成人までの生涯教育
 - 全レベルのヨーロッパ共通のフレームワーク

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

CEFRの特徴

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 教育現場への具体的指示ではなく、問題提起である。
- 現場は学習者の必要性、動機、特徴、学習教材について反省することを強く勧める。
- 教師・学習者だけでなく、教育行政機関、試験出題者、教科書著者・出版社の仕事に一貫性の基盤を与える。
- 記述に包括性・明示性・一貫性を保つ。

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

CEFRの政治的教育的背景

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- ヨーロッパの多様な言語と文化を保護し発展させる。
- 相互対話、相互理解を促進するために現代語を学ぶ。
- ヨーロッパの全体性・一体性をこれまで以上に考慮する。(EUの市場統合と人材の流動)

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

複言語主義

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 複言語主義 (Plurilingualism) は多言語主義 (Multilingualism) とは異なる。
- 多言語主義:
 - 複数の言語の知識
 - 特定の社会の中での異種の言語の共存
 - 母語話者モデル
- 複言語主義:
 - 学校の枠を超えた社会の中での言語使用
 - 方言や身振り・手振りも含めて、個人が状況に応じて言語をやり取りして目的を達成
 - 言語知識のない人を助ける
 - 理想的母語話者モデルを採らない

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

行動中心主義

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 言語使用者・学習者は社会的に行動する者、社会的存在であり、何らかの課題を遂行・完成することを求められる社会の成員である。
- 人はさまざまな条件の下で言語活動に携わり、テキストを産出・受容する言語処理を行う。
- テキストは特定の生活領域のテーマと関連する。
- 課題の成就を目指し、方略を用いる。

 慶應義塾大学外国語教育研究センター
Keio Research Center for Foreign Language Education
<http://www.flang.keio.ac.jp/>

4つのSavoirs

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- savoir: 叙事的知識 (declarative knowledge)
- savoir-faire: 技能 (skills) とノウ・ハウ (know-how)
- savoir-etre: 実存的能力
- savoir-apprendre: 学習能力

生涯学習と自律的学習者の養成

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- CEFRは学校教育のためだけにある枠組みではない。
- 生涯学習が視野に入れられている。
- 生涯学習を考えると、学校の役割が変わってくる→自律的学習者の養成
- 社会構成主義的学習観が背景にある。

日本におけるCEFR受容の問題

Action
Oriented
Plurilingual
Language
Learning
Project

- 共通参照レベルが一人歩きをしているのではないか？←英語一貫教育の議論 Cf. JACET 2007 での議論
- ヨーロッパ各国の公的テストの影響 (Goethe-Institut, DELF/DALF etc.)
- 複言語・複文化主義が議論の対象になっていない
- 言語学習・教育の目的、方法、教材開発、教員養成を含む包括的な議論が欠けている。
- CEFRの表層的受容は問題！自分たちの言語教育政策の課題としなければならない。